

はじめに——本書のもくろみ——

畿内に統一政権が形成された古代以来、東国の独自性は列島の歴史の中でさまざまに注目されてきた。中世史では、佐藤進一氏に代表される東国国家論が、かつて多くの研究者によつて注目されてきたことは今日なお記憶に新しい。その後、多くの批判が提起されてきたこともまた周知のとおりであるが、とくに国家公権の授権(委任)過程として幕府の性格を論じることが、この説の限界の一つとして浮かび上がっている。そこで最近では、高橋典幸氏が要領よく整理するように、朝廷・幕府両政権の關係性に焦点を当て捉え直すこと、つまりその「接点」を探ることから朝幕關係を再考することにより、幕府の性格についての再評価が始まっている(高橋典幸「鎌倉幕府論」二〇一三年)。このような見方は政權論を越え、「鎌倉と京」というより柔軟な枠組み設定のもと、都市・経済・社会・文化・宗教などを展望する通史的な叙述にも生かされ、独自性と一体性の両面から列島社会の中に東国を位置づけることを可能にしつつある(本郷恵子『京・鎌倉—ふたつの王権—』二〇〇八年)。

このような意味で、鎌倉幕府の崩壊後も東国の中心であり続けた鎌倉に注目し、そこから中世社会を展望することの重要性は引き続き変わらない。しかし、その質は前期と後期ではおのずから異なり、とくに後期には鎌倉以外にもさらに複数の中心が、東国に表れてくる。このような点からの中世後期の東国史研究は、渡辺世祐『関東中心足利時代之研究』(一九二六年)に始まる。その後、永原慶二「東国における惣領制の解体過程」(一九五二年)、峰岸純夫

「東国における十五世紀後半の内乱の意義」（二九六三年）によって、十五世紀の東国の内乱へ至る過程が、地域社会の矛盾や社会動向と結びつけて論じられ、戦国時代へと至る道筋が示された。一九八〇年代に入ると、佐藤博信（『中世東国の支配構造』ほか）・山田邦明（『鎌倉府と関東』ほか）両氏の研究によって、鎌倉府を軸とした研究がさらなる深化を見せる。両氏はとくに、鎌倉府が鎌倉寺院勢力を統率下に置き、その宗教的権威を支配に利用したことを指摘しており、東国史を権力論から寺社との接点へと展開したという意味で画期的であった。

このように、八〇年代には室町期東国の独自性・特殊性を強調する立場から、寺社の問題については、古河公方あるいは鎌倉府などの政治権力側による統制や編成といった論点が深められていった。そのいっぽうで、寺社側の自律的動向にも十分に注意を払った双方向的な関係論は十分に発展していない。また政治権力の拠点であった鎌倉寺社の問題のみが大きく取り扱われ、その他の地方寺社については十分検討されないままに取り残されている。寺社と地域社会との接点となった人・モノ・信仰などを通じて、その具体的な姿を明らかにしていくことが必要であろう。

本書では、以上のように戦前にまでさかのぼる研究史の再評価を踏まえたうえで、二〇〇〇年以降の史料環境の改善（自治体史や『南北朝遺文』の刊行など）のなかで、権力・支配・社会・宗教・文化など多くの面から各著者が温めてきた個別の関心を密接に結び合わせ、中世の東国社会から生まれた諸問題を批判的・総体的に再検討してみたい。そのためには、従来の日本中世史の枠組みを乗り越えて、美術史や中世考古学など隣接諸分野との対話を深め、それらの接点を探ることも不可欠であろう。その際、ともすれば権力による編成論になりがちであったこれまでの議論を省みて、中世社会における寺社や地域・民衆の主體的動向を組み込んだ形で、寺社と社会の接点を双方向的に考える。たとえば、市民をも巻き込んで近年ブームとなっている内乱について取り上げるにしても、事件史としての注目するのではなく、十四～十六世紀を焦点として前後の時代も見据えながら、地域社会や都市鎌倉の住人や僧侶などの動

向を動態的に捉えてゆく。こうした中世東国社会の諸側面を實態的に追及することを通じて、近年室町幕府や朝廷、畿内周辺に関心が集中しがちであった室町時代論にも一石を投じてみたい。

そこで本書では地域をせまく区切り、その内部の問題として「東国」を扱うことを避けている。したがって、権力や支配構造という意味でも宗教・文化という意味でも、〈東国とはなにか〉といった内向きに取れんしていく一元的・一方向的な問題意識を本書の中に見出すことは困難であろう。とはいえその逆の立場、つまり東国からひろく列島社会を見渡し、中世全体に問題を開いてゆこうとする本書の先に、けつきよくは〈東国とはなにか〉という意識へと回歸していく重要な回路があることもまた、認めないわけにはいかない。

* * *

「接点」を探るといふ構想が読者に伝わるように、本書ではたんに「政治と宗教」あるいは「権力と民衆」というような二項対立的な部立てを避けた。また、時系列的な構成をある程度意識しているが、必ずしも絶対視せずに配列している。

湯浅治久「中世東国社会論再構築の試み」は、現時点における東国社会論の意義をあらためてクリアーにしたいと、宗教社会史という方法に注目する。その上で、かつての永原慶二氏による東国の在家構造論のなかから百姓の自立と生活を取り上げて、「在家支配」を再評価してゆく。そのために長年取り組んできた「日蓮遺文紙背文書」（『中山法華経寺文書』）の活用から鎌倉期の百姓身分を検討し、さらに別の事例から南北朝期以降の集団化と自立に説き及ぶ。それらの契機として寺社や宗教の役割に注目し、権力と宗教の接点を媒介する社会の役割を再提起しているという意味で、本書全体の総説と位置づけたい。